

第117回「萩句会報告」 (順不同)

日時2019年5月13日(月) 14時～17時

兼題「雪溪」

川井素山 ○雪溪を仰ぐボッカの歩みかな
ひなげしの咲きし川洲や古戦場
廃舟に止まる小鷺や余花の雨
ジャスミンの香を湯にこぼす小窓かな

保井寶正 ○雪溪や群青の瀬に溢れ落つ
老婆掃く桜薬降る宴後
街に行く乙女の胸や夏めきぬ
句帳にも令和と記す聖五月

佐久間喬 ○雪溪のおぼろに光る夜明け前
山里の雨なめらかに木の芽吹く
花苗を選び雨待つ夏隣
神の山月に雪溪光りをり

丸山酔宵子 ○石垣を雪崩色増す芝桜
登廊牡丹の先は観世音
雪溪や屋台の祠輝かす
花みちて朝日に揺れる雪柳

菊地崇之 ○湯を渡る老鷺の声地獄谷
妹想う目を射る光バラの花
園庭や竜宮城の子供の日
KYや孤独を覚えぬ夏霞

吉田啓悟 ○一瞬の影置き去りに目高消ゆ
晩酌や鯖がそろそろしまる頃
雪溪や地球をめぐる雲のむれ
花散りて歌となりけり隅田川

青木英林 ○菖蒲湯に浸かる喜び齡喜寿
雪溪にヨーデル響く一万尺
鱧釣りや外道のメゴチ又旨し
鮎潜みし流れの岩の下

山本草風 ○雪溪に過ぎゆく時の残りけり
さくら花池に小紋の着物着せ
老いさらばへ千々の想ひの花の下
居酒屋に大声の人春闌ける

- 渡辺鯨波 ○夏燕靴に自動通訳機
青葉木菟飛驒高山の登り窯
雪溪やすぐ売り切れるパン工房
写メールの雪溪届く摩
- 後藤克彦 ○知らぬ間に空き家華やぐ花いばら
雪溪やどろどろとけて蕨出る
袖通し迷ひ迷ひの衣更
田植え機や行き来一瞬で苗の列
- 永井正孝 ○飛び翔ける模型複葉夏河原
早苗月演習田を整へり
夏川を警笛鳴らし電車過ぐ
岩壁に緑と雪溪闘ぎ合う
- 金森純女 ○（根津美術館にて）
これやこの雨に濡れにし燕子花
雪溪も小さくなりぬはるか富士
葉桜や光滴る日曜日
紫陽花やひとつ離れて紅咲かせ
- 佐久間たか子 ○薫風に誘われそして遠くまで
立山の大雪溪行くありの列
ゆう達の自撮りはみ出す大雪溪
眼に優し緑くらべて鯉幟
- 原 唱如 ○蚕豆のやうな足裏を並べたる
雪溪に青き空洞しづくする
萩焼の薄き貫乳新茶汲む
豆ごはん祖母の写真に醤油味
- 青葉ひかる ○感情の納めどころか雪溪に
青時雨平成フィナーレ遊ぶ人
領域に踏み込めぬまま五月曇
花水木君と戯れし時いずこ

次回「萩句会」

日時 2019年6月10日（月）14時～17時

場所 下目黒住区センター第二会議室

兼題 『枇杷』一句
当季雑詠 三句